

# 幼児における身体表現活動の実践・ 研究の課題ならびに科学的視点からの提案

長 野 真 弓

## I. はじめに

平成 18 年に改訂された教育基本法 [1] において「幼児期の教育」の項目が新設され、幼児期の教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培う上で重要なものであることが明記されるに至った。これを受けた施策として、同 18 年に保育所と幼稚園の機能を一体化した「認定こども園」制度が創設されるなど、就学前教育の充実を図る動きが活発化しつつある。これに伴い、保育所のガイドラインである保育所保育指針（以下「保育指針」）は、昭和 40 年の制定に始まり、平成 2 年、平成 12 年の改定を経て、平成 20 年に従来の局長通知ではなく厚生労働大臣による告示として 3 度目の改定に至った。これは、めまぐるしく変化する社会的情勢を踏まえ、子育て家庭とその子どもをとりまく状況の課題や問題点に対応し、さらなる保育内容の充実と質の向上を図ることを意図するものであり、保育所の役割と機能がより一層重要視されていること、およびその責任が極めて重大であることを示している [2]。

このような中、保育指針で提示された保育のねらい及び内容に位置づけられた「表現」の領域では、「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」が目標とされている。さらに、「保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせ

て体を動かしたりして遊ぶ」という、「遊び」を通してからだところの健やかな発達をねらった教育内容が提示されている [2]。

「身体表現」には様々な側面があり [3]、それをどのように認識するかによって実施する内容も違ったものになる。本稿では、保育指針における「身体表現」の定義ならびにその重要性を再確認するとともに、先行研究や調査報告から得られた客観的情報をもとに、科学的視点から健やかな「ところ」と「からだ」を育む身体表現の実践・研究の課題と今後への提案について述べることとする。

## II. 保育指針における身体表現の 定義とその重要性

保育指針における「表現」は、大きく芸術（音楽・絵画・創作等）活動ならびに身体表現活動という領域で構成されている。身体表現というと、一般的には「創作ダンス」や「リズムダンス」など、舞踊の要素を含んだ身体活動と見られがちであるが、筆者はそれを狭義の身体表現と考えている。前述した保育における表現活動の目標とその内容から、筆者は、保育における身体表現について、「からだを使った遊びに伴う自己表現や他者とのコミュニケーション等の精神活動を促して、言葉の発達ならびに健やかなところとからだをバランスよく育む活動」と

広い意味で捉えることとしたい。実際の保育現場では、子どもが身体を使って他者に何かを伝えようとしたり、おままごとや「・・・ごっこ」に見られるように、自分以外の「何か」になりて遊ぶ場面がしばしば見られる。これこそが、子どもの内面が自然ににじみ出た身体表現といえよう。

子どもが遊びから得るものは計り知れないほど多い。遊びの中にあるルールは、それを守らないと遊びが成立しない、つまり大人でいう社会的規範を守ることの予行演習ともいえる。必ずしも仲のいい友達とだけ遊ぶことができない場合、我慢してつきあうこともあるだろうし、複数人でないといけない遊びでは、自ら仲間を誘って集めなくてはならない。遊び道具を譲り合って使う、他の子のおもちゃを使いたい時には「貸して」とお願いする、遊びの最中に友達とけんかをすれば、互いに歩み寄って仲直りする、年が違う子ども同士では、年上の子が年下の子の面倒を見るなど、子どもの遊びには社会生活を営む上で基本とされる自己表現や他者とのコミュニケーション能力を育てる極めて多様な要素がつまっているのである。さらに、どこで、誰と、何を使って、何をして遊ぶのか、決めるのは子ども自身であり、豊かな創造力を育むのにも遊びは必要不可欠といえる。

しかしながら、冒頭に述べたとおり、近年の子どもと子育て家庭をとりまく環境は厳しさを増すばかりである。安心してのびのびと遊べる場所の不足は本来の子どもの「仕事」である「自由な遊び」の機会を失わせつつある。核家族化の進行や地域住民同士の人間関係の希薄化もあり、子どもの遊びの質が変容し、自己表現能力や他者とのコミュニケーション能力の発達を妨げているといわれる。近年の教育現場からは「すぐキレる」、「落ち着きがない」、「意欲がない」、「言うことを聞かない」、「乱暴な言動

をする」、「協調性がない」、「いじめる、いじめられる」、「人前でしゃべれない」といった子どもの問題行動に関する声がしばしば聞かれる。子どもは、自分が踏みにじられた怒りや悲しみ、恐れをうまく表現することができないため、それが反抗や乱暴な行動、いじめなどの外部への攻撃行動や自分に関心を向けさせようとする行動、さらには自分の殻に閉じこもる、など様々な行動として現れる。いわば、これも負の方向に表出した子どもの「身体表現」と捉えることができる。このように、幼児期の表現は、どのような形であれ身体を介して行われることが多く [4]、H. ワロンの訳本 [5] の中でも、「運動が心的生活のすべてをあらわす」と述べられるほど、子どもの精神発達過程においてからだを動かして遊ぶことがいかに重要であるかが強調されている。

遊びの質とところの状態との関連を客観的指標により検証し、上記の見解を支持した興味深い報告 [6] がある。小学生 2205 名を対象とした遊びの実態とところの状態との関連を検討したこの報告では、近年の子どもの遊びは身体を動かす外遊びよりもテレビゲームやマンガを読むなど、室内遊びを好む傾向にあり、遊ぶ集団の人数も少数化していた。さらに、標準化された質問紙で評価された攻撃性は主に内遊びをする児童で有意に高く、社会性は外遊びをする児童で有意に高かったという。さらに詳しく見ると、ボール遊びやおしゃべりをよくする児童は、本・マンガを読む、あるいはテレビゲームをすることが多い児童より有意に高い社会性を示し、集団遊びを好む児童で社会性が高いという結果が示されている。これは小学生におけるデータであり、幼児が全く同じ様相を呈するかどうか不明であるが、子どものところの発達と遊びの質との間に関連性が存在することを客観的データにより示唆した貴重な資料といえる。

厚生労働白書平成15年版[7]にも、1990年から2000年の10年間で、就学前の子どもの遊びの実態がいかに変容したかを示す報告がある。それによれば、いつも遊ぶ場所が「自分の家」という回答は1990年で8.2%であったのに対し、2000年では74.5%と劇的に増加し、「家のまわり」や「公園」で遊ぶ子どもの割合を大きく上回っている。このことは、前述した小学生の調査結果と同様に、この10年間で幼児の外遊びの機会が著しく失われている事を示している。幼稚園児約60名に三次元加速度計を装着して身体活動量を測定し、園における自由な遊び時間中の身体活動の強度と時間を割り出した筆者のデータ（未発表）でも、降園後の手遊び時間やテレビ視聴時間が長い園児ほど、園の遊び時間においても自発的に走る・跳ぶといった比較的高強度の身体活動時間が少なく、遊びの質の偏りが幼児期から認められるという興味深い結果が得られている。幼児期におけるこのような傾向は、当然ながら児童期になってもなお続くであろうことは容易に想像できる。

このような状況を踏まえ、保育者は、こころの発達に重点をおいた「身体」という保育内容について、「からだを動かすことを介して子ども自身の内面にある様々な感性・感情が言葉とともに表出するよう促す」ことを十分理解しておく必要があると考えられる。具体的にいえば、保育者は、幼児期という人格形成上極めて重要な時期に、遊びを成立させる3つの要因（遊びの空間・遊びの時間・遊びの仲間）[6]という環境を整備し、自ら一緒に遊んで子どもがより自由な身体表現を行えるよう自然な働きかけをすることで子どもの内面にある様々な欲求、感性、感情を思う存分表出させるとともに、身体を使った活動を介して体力や身体能力の基礎を培うという、人生の基盤ともいえる健全な心身を育む極めて重要な役割を担っているのである。

### Ⅲ. 幼児における身体表現活動の実践の現状と課題

ここで、幼児の身体表現活動の現状の実態を調べた数少ない研究を紹介する。

古市[3]は、「身体表現」の認識が曖昧なまま実践と研究が進んでいることを問題視し、新要領で「表現」領域が設定された1990年以降に日本保育学会における子どもの心的過程に焦点を置いた「身体表現」に関する研究発表とともに、想像力の育成、感情表出、身体表現の発表、模倣欲求、心の解放、同調的動作、うそっこ世界、交流欲求、ごっこ遊びの発展、表現感動の体験、文化の伝達、自己確認という12の側面を抽出した。さらに、幼稚園教諭104名へのアンケート調査で、現場の教諭らはこれら12の側面のうち、創造力の育成、感情表出、心の解放が特に重要だという認識を持ちつつも、実際に行われているのは主に生活発表会等の表現発表、友達どうしてまねっこをする模倣、リズムダンスなどの同調的動作であり、本来教諭が重要と考える側面とは若干異なる側面をもつ活動が多く行われている現状が報告されている。

一方、遠藤[8]は、上級免許取得のために開講された「幼児の身体表現」の講義に参加した現職の保育者48名を対象としたアンケート調査で、身体表現指導における問題の要因と割合を示している。それによれば、言葉かけや抵抗感のある子どもへの対応、教師のねらいと子どもの興味関心のギャップなど、「指導の難しさ」が66%と困難感の大半を占める形となっている。次いで、保育経験10年以上の指導者がほとんどであったにも関わらず、「教師自身の苦手意識・力量不足感」が11%を占めた。内容として「子どもの表現を引き出せない」、「リラックスして自由に楽しめない」、「気構えてしまう」など、指導者自身が緊張して指導にあたっ

ている姿が浮かび上がってくる。教材・題材・音楽選びや発表の場に関して困難を感じる「環境構成」も同率で 11% となっているが、この中には、園の行事における発表を見る側（保護者）の評価を意識するあまり、子どもが楽しめているかどうか疑問を呈する声もあった。さらに、きちんとした姿勢を保てない、話を聞かないといった「子どもの基本的な姿（態度）」9% が挙げられ、表現活動以前に、子どもの基本的な態度やしつけの欠如を指摘する回答が認められた。

上記 2 つの調査分析による結果は小規模の集団から得られたもので、これが保育全体の状況を表すことにはならないが、今後の保育における身体表現活動のあり方や実践内容、さらには人材育成を考える上で重要な示唆を含んでいる。目まぐるしく数多くの行事をこなす幼稚園や保育園においては、教諭らが理想とする身体表現活動を展開するための十分な時間的・人的ゆとりがないのかもしれない。また、運動会や発表会などのプログラムとして身体表現活動を保護者や他の園児に見せるとなると、どうしてもその練習に時間とパワーが費やされてしまい、結果的に本来求められている身体表現活動と異なる側面の活動に内容が偏ってしまう現状もうかがえる。さらに、園に十分な身体表現活動の経験を有する保育者が必ずいるとも限らない。研修会は日々行われているのであろうが、突き詰めて考えると、身体表現以前の問題として、指導者自身が運動が嫌い（運動が苦手）であれば、身体表現の指導に気が進まない可能性は高いと思われる。将来的に子どもの健全な心身の発達を担うわけであるから、保育者を育成する大学教育過程において、運動に苦手意識を持っている学生でも身体を動かすことが楽しいと感じるような体育授業の展開が求められる。

#### IV. 幼児の身体表現に関する研究の現状と課題

一方、身体表現に関する研究について、筆者は、国立情報学研究所論文情報ナビゲータ CiNii を検索エンジンとして使用し、「幼児」・「身体表現」というキーワードをもとに国内における研究報告を検索してその種類と動向を調べた。その結果、118 件が抽出され、そのうち学会抄録を除く論文ならびに報告書を含む 51 件の内容を調べた。研究報告の内容で圧倒的に多かったのが、実践した身体表現プログラムの内容と、それに対する幼児の動きや心的過程について記述した事例報告 26 編である。次いで、身体表現活動の映像を観察した研究 15 件（事例研究とも判断される内容あり）、さらに、実践・研究における方法論や教材研究が 5 件、身体表現活動の現状に関する調査研究 3 編、文献研究 2 編となった。全体的な内容の傾向として、現場指導に密着した実践的研究が大半を占めており、保育関係者の日々の指導内容や技術の充実を図る努力がなされている事がわかる。成長著しい幼児を対象とする保育分野において、日々の実践が何より重視・奨励されてきたことの現れともいえる。

しかしながら、いくつかの課題も浮かび上がってくる。1 つ目は、上述したとおり研究の種類が事例研究に著しく偏っていることである。個々の保育者が用いた教材・プログラムの事例はあくまで指導例であり、指導題材や構成を考える上で参考にはなるが、広い視点で保育における身体表現を見た時に、事例研究だけでは保育者の日々の指導、教育体制のあり方や環境整備に活用できる普遍的な情報を得ることは困難である。前述した古市 [3] や遠藤 [8] の報告のような、保育における身体表現活動の現状や課題を把握できる調査が極めて少ないため、



保育者自身が担当する現場や教育内容を客観的視点で捉えることができず、改善すべき課題が見えにくい。

2つ目は、身体表現活動の効果ならびに重要性を主観的な考えに基づいて述べた研究が多く、子どもの心身にいかに身体表現活動が好影響を及ぼすかというような、客観的指標に基づいて身体表現の存在価値を明確に示す効果検証や長期的な追跡研究が皆無に近いということである。最大の理由として、著しい発達のさなかにある幼児期の子どもを対象とした分野であるが故に、客観的評価が非常に困難であるという方法論の問題が挙げられる。成長期を経て心身機能が安定した大人とは異なり、子どもの心身は刻々と変化・成長を遂げている。それ故、その月齢に通常認められる心身機能の発達と教育効果を区別して把握することが大変難しいのである。加えて、大人を対象とした調査でごく普通に用いられる質問紙調査が幼児期の子どもではできない上、やっと言葉が出はじめるこの時期に、聞き取り調査をすることもできないため、必然的に子どもの行動観察による質的分析が多くなってしまうのであろう。さらには、倫理的配慮の問題もある。当然ながら、成人に対しては、当人に直接参加の可否を決めてもらうことができるが、子どもの場合、保護者に調査の意義と内容、調査結果のフィードバックについて十分に説明して理解を得た後、子どもの負担が極力軽減された形で調査研究を進めなくてはならず、質の高い研究を実施するためのハードルは決して低くない。

しかしながら、表現という領域が保育指針に設けられるには、それなりの根拠があるはずである。その根拠が主観的な意見・分析に基づくものだけでなく、科学的・客観的データの裏付けにより支えられることは、施策の方向性や成果の確認を含め、極めて重要と考えられる。日々

刻々と成長していく幼児を前に、長期的視点で教育効果を観察する余裕があるのだったら今すぐ何かプログラムを実施する方が子どものためになるのでは、との異論もあろうかと思うが、客観的な根拠や成果が施策に求められている昨今の状況から、実践と並行して長期的に子どもの心身の変化を追い、客観的視点で身体表現活動の成果を検証する試みは、幼児の身体表現教育を発展させる貴重な基礎資料となることが期待され、評価に値すると思われる。

## V. 幼児の身体表現活動に関する 新たな視点からのアプローチ

ここで、別の視点から幼児の身体表現にアプローチした興味深い研究を紹介する。佐藤 [9] は、年長児 65 名に線引き課題、表情筋運動課題、表情理解課題、情動表現課題の 4 つの課題を行わせ、手指の運動制御ができる子どもほど表情筋運動が制御でき、また、表情筋運動の制御ができる子どもが表情による情動表出も制御できていたことを報告している。つまり、手指を巧みに動かすことができる子どもほど、表情が豊かで感情表出がうまくできているということであろう。さらに解釈を進めれば、手遊び、指遊びなどの身体表現活動が、子どもの感情表出にポジティブな影響を与える可能性が示唆されたといえる。一方、鈴木 [10] は、身体表現活動のねらいの 1 つである「豊かな感性」に着目し、幼児ではなく保育者 277 名に「感性豊かな子」のエピソードを記述させることで、豊かな感性を示す項目を選出し、信頼性と妥当性の検討を加えた上で幼児期の感性尺度を開発した。今後、この尺度の保育現場での実用性を検討することが課題となるが、もしその有用性が確認できれば、子どもの感性の育ちを追う貴重なツールになるであろう。筆者自身も、本来子ども向けに

開発されたものではないが、幼児においてもその信頼性・妥当性が確認されている歩数計サイズの加速度計を実際に幼児に装着し、幼児に負担を与えることなく身体活動量の測定ができることを確認している。これらのツールを活用することにより、子どものこころの状態と身体活動量との関連を検討することも可能となるであろう。さらに近年、表情解析技術が進み、「笑顔」を数値化する装置が開発された。筆者は現在、質問紙への回答が困難な高齢者への運動による認知機能改善プログラムの効果評価にその装置を使用しているが、今後、幼児の情動やこころの状態を示す簡易な指標としての応用可能性も検討したいと考えている。加えて、質問紙に回答可能となる小学生中学年の子どものうち、幼児期からバレエ・ダンス等の身体表現活動が続けている子どもと、特に活動をしていない子どもの心身の特性を比較して、身体表現活動ひいては身体活動が子どもの心身に及ぼす影響を検討したい。

以上のように、実践研究とともに、全く異なる視点から身体表現にアプローチする研究が活発化し、その成果が有用な資料となって保育における身体表現の実践や保育者の育成過程にフィードバックされることが今後さらに望まれる。これにより、幼児の身体表現活動の実践・研究・人材育成の3つがバランス良く発展することを期待したい。

#### <参考文献>

- 1) 文部科学省:教育基本法, 2006.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/about/06121913/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/001.pdf)
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課: 保育所保育指針解説書, 2008.  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf>
- 3) 古市久子: 幼児の身体表現活動における諸側面についての一考察. エデュケア 16, 19-25, 1995.

- 4) 名須川知子: 幼児前期の身体から派生する表現活動に関する研究. 兵庫教育大学研究紀要, 17, 115-122, 1997.
- 5) 浜田寿美男 (H. ワロン「子どもの精神発達における運動の重要性」1956を訳編): 『身体・自我・社会』, ミネルヴァ書房, p.138, 1984.
- 6) 遠藤 俊郎, 星山 謙治, 安田 貢, 斉藤 由美: 遊びが児童の心身に与える影響について — 児童の攻撃性・社会性に着目して —. 教育実践学研究: 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 12, 25-34, 2007.
- 7) 厚生労働省: 厚生労働白書平成15年版, 第2章子どもをとりまく現状・課題. 2003.  
<http://www.whakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpax200301/b0044.html>
- 8) 遠藤 晶: 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について — 身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して —. 武庫川女子大紀要 (人文・社会科学), 54, 91-99, 2006.
- 9) 佐藤幸子: 幼児における表情による情動表現と運動制御の関連に関する研究. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55 (2), 149-163, 2007.
- 10) 鈴木裕子: 幼児の感性を具体化する試み—幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして—. 保育学研究. 47 (2), 2009.